

和歌の調べ

奈良時代	
710	平城京遷都 ^{せんと}
712	『古事記』
720	『日本書紀』
759	『万葉集』最後の歌
平安時代	
794	平安京遷都
9c後半～10c初め	『竹取物語』
905	『古今和歌集』 ^{こきん}
1000頃	『枕草子』 ^{まくらのそうし}
1008頃	『源氏物語』
12c	『今昔物語集』 ^{こんじゃく}
1185	平家滅亡 ^{めつぼう}
鎌倉時代 ^{かまくら}	
1205	『新古今和歌集』

● 和歌

五音と七音を基調とした定型詩。

● 万葉集
まんようしゅう

ぢとうてんわう
持統天皇

春過ぎて

春が過ぎて

夏来たるらし

夏が来たらしい。

白たへの

真っ白な

ころも

衣が干してある。

衣干したり

あめ かぐやま

天の香具山

あの天の香具山に。

やまべのあかひと

山部赤人

田子たごの浦ゆ

田子の浦を通過して

うち出いでて見れば

視界の開けた場所
に出てみると、

真白にそ

真っ白な

富士ふじの高嶺たかねに

富士の高嶺に

雪は降りける

雪が降っていたことだ。

ぬかたのおほきみ

額田王

君待つと

あなたがおいでに

あこ

なるのをお待ちして

吾が恋ひをれば

恋の思いを抱いて

わやど

いると、

我が屋戸の

わが家の

すだれ動かし

すだれを動かして、

秋の風吹く

秋の風が吹いてい

ることだ。

おほとものやかもち
大伴家持

春の野に

春の野に

かすみたなびき

霞かすみがたなびき

うら悲し

心は悲しく思われ
る。

この夕影に

この夕暮れの光の
中

うぐひす鳴くも

鶯うぐいすが鳴いている
ことだ。

あづま

うた

(東歌)

たま

多摩川に

多摩川で

さらす手作り

さらす手作りの布
のようじ、

さらさらじ

さらさらじ、

なにそこの児この

どうしてこの娘むすめが

ここだかなしき

こんなにもいと
くなるのだろう。

さきもり

(防人の歌)

父母が

父と母が

かしら

頭かきなで

頭をなでて、

わ

幸くあれて

「元気でな」と

けとば

言ひし言葉ぜ

言ってくれたその
言葉が

忘れかねつる

忘れられないこと
だ。

やまのうへのおくら

山上憶良

うりは
瓜食めば

瓜を食べると

子ども思ほゆ

子どものことが自

くり
栗食めば

然と思われる。
栗を食べると

ましてしぬはゆ

さらにもましてし
のばれる。

いづくより

いったい、子ども

来たりしものそ

というものはどこ
から来たものか。

まなかひに

目の前に

もとなかかりて

わけもなくちらつ

やす
安眠しなさぬ

いて、
安眠をさせない。

はんか
反歌

しろかね

銀も

銀も

くがね

金も玉も

金も玉も、

何せむに

どうして

まさ

勝れる宝

優れた宝である

子にしかめやも

子に及ぶおよだろるか、
いや及びはしない。

●古今和歌集

きの つらゆき
紀貫之

袖そでひちて

(去年の夏に)袖を
ぬらして

むすびし水の

すくいあげた清水の
水が

こほれるを

(冬になって)凍こおり
ついてしまったのを、

春立つけふの

立春の今日の

風やとくらむ

風が今頃ごろ溶かしてい
ことだろう。

よみ人知らず

五月待つさつき

五月の到来を待つてとうらい

花たちばなの

咲くさ橘たちばなの花の

香をかげば

香りをかぐと、

昔の人の

昔親しかったあの人
の

袖の香ぞする

袖の香りを思い起こ
すことだ。

みなもとの むねゆき

源 宗于

山里は

山里は

冬ぞぞむびしち

冬になると寂^{さび}しさが

まさりける

身につまされるものなのだな。

人目も草も

訪れる人もなく、草木も

かれぬと思へば

枯^かれてしまふ、と思うと。

をののこまち
小野小町

思ひつつ

あの人のことを恋

ぬ
寝ればや人の

しく思いながら

寝たので、あの人が

見えつらむ

夢の中に現れたの
だろうか。

夢と知りせば

もし、それが夢と
知っていたなら、

覚めざらましを

目を覚まさなかつ
ただらうに。

●新古今和歌集

ふぢはらのさだいへ
藤原定家

春の夜の

春の夜の

夢の浮橋

短い夢が破れ、

うきはし

とだえして

外を見やると、

峰^{みね}にわかるる

横雲が峰から離れ

横雲の空

てゆく

あけぼのの空であ
るよ。

ちんぎやうほふし

西行法師

心なき

出家して俗世間の
感情を捨て去った
僧の私だが、

身にもあはれは

その私でもしみじ
みとした思いにと
らわれてしまう。

知られけり

しぎ
ちは

鳴立つ沢の

鳴が飛び立つ沢の
美しい夕暮れを見
ると。

秋の夕暮れ

しよくししないしんわう

式子内親王

を

玉の緒よ

私の命よ。

絶えなば絶えね

絶えてしまふなら
絶えてしまいなさ
い。

ながらへば

これ以上生き長ら

しの

忍ぶることの

えていると、

この恋を胸に秘^ひめ
ておく気力が弱ま
り、人に知られて
しまふといけない
から。

弱りもぞする